

3

「須佐之男厄神退治図」(葛飾北斎)に描かれた病

鈴木 則子

奈良女子大学

「須佐之男厄神退治図」は弘化2年(1845)、牛嶋神社の開帳に際して奉納された絵馬である。江戸時代の牛嶋神社は牛島御前社、牛御前社とよばれ、須崎の北西の大川(隅田川)端にあり、須佐之男命(牛御前)、清和天皇第七皇子貞辰親王之命(王子権現)、天之穗日命の三神を祭る牛嶋の総鎮守であった。病氣平癒・除災招福の利益ある須佐之男命=牛頭天王を祀る社として親しまれた。明治初年の神仏分離後に現社名の牛嶋神社に改め、関東大震災ののち南方の現在地、東京都墨田区向島一丁目に移転した。

絵馬は当時86歳の葛飾北斎(宝暦10~嘉永2年, 1760~1849)の作品である。牛嶋神社祭神である須佐之男命に宛てた詫び証文に、十数疋の疫鬼たちが手印を押す様子が、幅三メートル近い巨大な画面に描かれる。本報告は、この絵馬に描かれた疫鬼たちがそれぞれ何の病を象徴しているのかを周辺資料をもとに推定し、幕末期江戸の疾病事情について考察を加えるものである。

ただし、この絵馬は大正12年(1923)、関東大震災の折に焼失して実物は現存しない。したがって検討は焼失前に撮られた絵馬の写真および模写を通じて行う。写真は『国華』第二十編第二百四十号(明治43年5月発行)掲載の挿図「葛飾北斎素戔雄尊図(写真版)」、模写は山内天真画(明治15年, 1882~?)『東都絵馬鑑』(国会図書館蔵)と、窓鷺画「須佐之男命厄神退治」(大英博物館蔵)である。

現段階では絵馬に描かれた疫鬼たちが象徴するすべての病を特定するには至っていないが、その症状描写、幕末期江戸の町の疾病流行状況、北斎が書き残した他の絵画等から、疱瘡、梅毒、インフルエンザ、疥癬、巨大耳下腺腫瘍、陰囊水腫、白皮症、下肢障害、猩紅熱が描かれている可能性を指摘しておく。

北斎はなぜこの絵馬に様々な病を描いたのだろうか。また、この絵は当時の人々の疾病観を投影したもののなのか。奉納された弘化2年は日本で牛痘接種が行われる4年前、『断毒論』が書かれる35年前である。また、江戸の町で麻疹絵が大量出版された麻疹流行は17年後の文久2年(1862)、コレラが初めて日本に入ってきたのは文政5年(1822)、次のコレラ流行は安政5年(1858)である。その意味では特別に流行病への危機意識が高まっていた時期とは考えにくい。幕府の出版統制で浮世絵の規制が厳しく行われたため、あたりさわりがなく、かつ祭神須佐之男との関連から選択された画題であったと思われる。

またこの絵馬から単純に、当時の市井の人々は疫鬼が病をもたらしたり媒介すると信じこんでいたと即断することは避けたい。医療情報にあふれた大都市江戸の人々の病氣観を論ずるには、さらに多様な史料の分析が必要である。私がここで注目したいのは、明確な病因がわからず、また治療法もない病氣に対し、撲滅するのではなく手なづけようとする江戸時代人の姿勢である。疫鬼たちは成敗されるのではなく、須佐之男に従順を誓うことによって存在を許容される。私はそこに、耐性菌出現とのいたちごっこや新興感染症への対応の果てに現在の感染症対策がいきついた、病原菌との「共生」という発想と通底するものを見出す。